

武田五一 コウモリマークを選んだ建築家

2016年4月6日(水) – 6月26日(日) 会場：常設展示室

※月曜休館 ただし5月2日(月)は開館
 ※講演会「武田五一とは何者なのか」(講義室、聴講無料) 4/23(土) 午後2時より
 ※ギャラリートーク(展示室) 5/20(金)、6/17(金) 午後2時より

武田五一(1872-1938)という建築家をご存じだろうか。

「関西の近代建築の父」と形容されることが多い福山市出身で、多岐にわたる業績をもつ建築家である。

主な業績としては、近代における最初の茶室研究、初めての意匠設計(格好=プロポーション)の学術的な研究、セセッション(分離派)やアール・ヌーヴォー、グラスゴー派の日本への紹介・導入、京都高等工芸学校(現、京都工芸繊維大学)における図案学教育の確立、京都の近代工芸への貢献、セセッション風と数寄屋建築との融合の様式としての芝川又右衛門邸の設計、フランク・ロイド・ライトの日本への紹介、京都帝国大学(現、京都大学)工学部建築学科の創設、スパニッシュ様式の日本への導入、法隆寺昭和の大修理の実施、帝国議会議事堂(現、国会議事堂)建設への貢献などが知られている。

建築作品としては、福島行信邸、芝川又右衛門邸、村井吉兵衛邸(現、山王荘)、山口玄洞邸(現、聖トマス学院)、京都府記念図書館(現、京都府立図書館)、山口県県議事堂(現、山口県議会資料館)、福山市公会堂、京都市庁舎本館、名和昆虫研究所記念昆虫館、同志社女学校ジェームズ館(現、同志社女子大ジェームズ館)、京都帝国大学工学部建築学教室(現、京都大学工学部建築学教室本館)、京都帝国大学本館(現、京都大学百周年時計台記念館)、東方文化学院京都研究所(現、京都大学人文科学研究所漢字情報センター)、日本勧業銀行本店(現、千葉トヨペット)、大阪毎日新聞社京都支局(現、1928ビル)、京都電燈本社(現、関西電力京都支店)、播州清水寺などで、近代建築として歴史的価値があり、かつ一般的にも有名な建物も多いが、代表作を1つに絞るのが難しい建築家である。



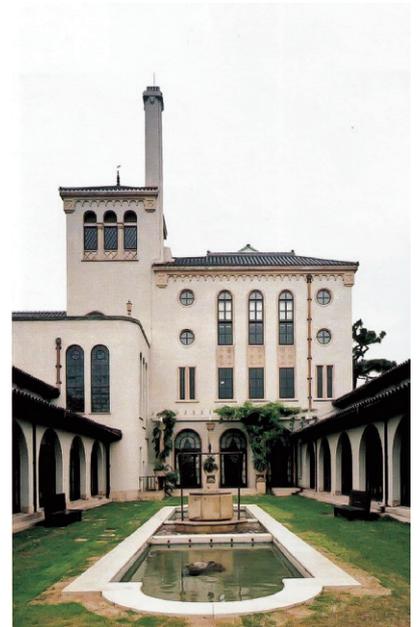
4 武田五一肖像

人物とその足跡

武田の父・直行(通称は平之助)は福山藩士で、1838年(天保9年)に武蔵国の本郷丸山、つまり江戸における阿部家丸山屋敷の中屋敷の武田屋敷(現、東京都文京区西片)に生まれた。明治維新後は、1869-70年(明治2-3年)に少参事に就き、権大参事となる。1876年(明治9年)には、兵庫県警部として神戸に赴任、1881年(明治14年)、検事として神戸・姫路裁判所詰、1882年(明治15年)、岐阜始審裁判所詰、1886年(明治19年)、高知始審裁判所詰、1890年(明治23年)、判事となり広島始審裁判所詰、1891年(明治24年)、三次区裁判所判事、監督、1897年(明治30年)、司法省退職となる。直行は、藩士から県の役人、国の役人となるなど生涯に渡って官吏として活躍し、1912年(明治45年)に73歳で没した。

父・直行と母・八重の間には、長女・銀、二女・鈴、三女・柳、四女・待、長男・五一、五女・六、六女・信、二男・八二(早世)、七女・久米(早世)という二男七女の子がいた。五一の名の由来は、5番目の子で長男という意味と、五大州で一番の人間になってほしいという願いもあったといわれる。

武田五一は、1872年(明治5年)11月15日に、福山市西町に生まれるが、父・直行の転勤に伴って全国各地に移ることになる。1876年(明治9年)、4歳の時には家族と共に神戸に移り、6歳で神東小学校に入学、9歳の時に姫路に移って、城東小学校に転校し、翌年10歳の時に岐阜に移るや、華陽学校附属小学校に転校する。12歳の時に同校附属中学校に入学した時は、後に「ギフチョウ」発見の昆虫学者となる名和靖が同校に助教諭試補として勤めていた。名和は、生物学者になりたいと言っていた武田に昆虫の描き方を教えているが、この時の縁で武田は、35歳の1907年に名和昆虫研究所記念昆虫館を設計するようになるのである。14歳の時に高知県尋常中学校に入学し、1888年(明治21年)、16歳で京都に創立されたばかりの第三高等中学校補充科に入学する。同校には5年上級の先輩、塚本靖(1869-1937)がいて、その出会いには運命的なものがあり、後に塚本は東京帝国大学工科大学造家学科(建築学科)に進学してからも、第三高等中学校予科一級に進んだ武田を誘い、関西の寺社調査見学の時に度々同行させるなど、建築実測に少しずつ引き込んでいった。武田は、人一倍背が高く、鉛筆デッサンも上手だったので、実測にはうってつけの助手だったのだろう。このようなこともあり、武田は、建築



参考) 東方文化学院京都研究所(現、京都大学人文科学研究所漢字情報センター)

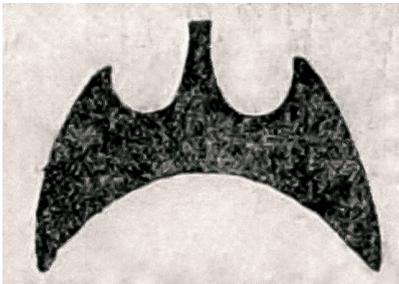


8 久保田鼎など
《武田五一ヨーロッパ留学 送別画帖》

に興味を持ち、やがてその世界に足を踏み入れていくようになるのである。

武田は、1894年(明治27年)に帝国大学工科大学造家学科(1899年より東京帝国大学)に入学し、同年9月には、東京・西片町(現、東京都文京区西片)にある誠之舎(せいししゃ)に入舎して、学生生活をスタートさせる。誠之舎というのは、1890年(明治23年)に旧福山藩主阿部家が育英事業の一環として、旧福山藩内から上京して勉強する学生のために創設された学生寮で、最初の舎屋は、養蚕小屋を増改築したものであった。当時の東京帝国大学造家学科には、明治の建築界をリードする辰野金吾を中心とした錚々たる教授陣が待ち受けていたが、武田は、卒業論文「茶室建築」と卒業設計「音楽学校とコンサートホール」によって首席で卒業するほどの優秀な学生であった。その後、大学院に進むが、1899年(明治32年)に退学して、東京帝国大学工科大学の助教授になったというエリート中のエリートであった。その授業たるや、厳しいことで有名で、学生たちも「インゴーゴイチ(因業五一)」と言いながら製図をしていたというエピソードがあるほどであった。

武田は、1898年(明治31年)の26歳の時、東京高等工業学校教授で後に校長となる阪田貞一の長女、17歳の阪田保子と結婚し、東京・西片町に両親と住むようになる。阪田家は士族で、経済的には余裕があり、武田に対しても援助を惜しなかったというが、当時はまだ大学院生から助教授になったばかりで、経済的には苦しく、襟が擦れてくたびれた洋服をいつも着ていた。恩師の辰野金吾も見るに見かねて、「設計のアルバイトをさせ、これで服でも買え」と金くれたと、武田は家族に語り聞かせている。



参考) 間部時雄《福山市記章案》

武田には5人の子供がいて、上3人が男、下2人が女だった。長男の直秀は、機械工学専攻で、北海道大学の教授となり、次男の英吉は、土木工学専攻で、神戸高等商業学校(現、神戸大学)の教授となり、三男の猛夫は、飯田家に養子に行くが、武田家で育ち、建築技師となった。長女の満亀(禎)は、和田篤憲と結婚したが、次女の雪は、独身のまま20歳で夭折した。

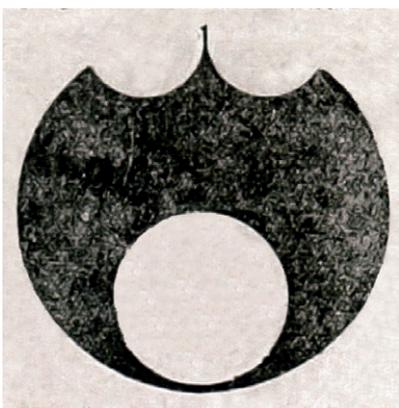
武田は、結構な子煩悩で、とくに2人の娘を可愛がって遊んだりしている。夏などは、健康にいいからといって嫌がる娘を水風呂に入れ、石鹸もつけずに武田の手でごしごし洗ったり、古社寺の修理の仕事の時も、子供同伴で出向き、現場で遊ばせたりしていたというほどであった。これはひとつには、病弱で寝たり起きたりの生活であった妻への心遣いからだったという。そんな細やかな心遣いの武田であったが、5尺8寸(175cm)余りの、明治・大正期としてはかなりの長身の男であり、子供たちも揃って長身であったようだ。ある時、市電に乗って家族で出かけ、目的地で一斉に立ち上がった時、あまりの背の高さに乗り合わせた乗客が腰を抜かしたというエピソードがあるほどであった。

コウモリマーク(福山市章)の誕生

武田は、1901-1903年にイギリスを中心として欧州に留学し、アール・ヌーヴォーやセセッション(分離派)に触れて帰国した。帰国後すぐに京都高等工芸学校教授となり、1918年(大正7年)には、名古屋高等工業学校(現、名古屋工業大学)の校長として名古屋に転任し、さらに1920年(大正9年)、京都帝国大学工学部の建築学科の創設とともに教授となって京都に戻り、以後京都で過ごすことになる。

武田の福山市との関わりは、1916年(大正5年)3月に市制施行準備のため、市章のデザイン選定を依頼されたことから始まる。福山市当局は、独自に福山市章の選定を行っていたが、当時の新聞報道で、「福山町にては記章を選定せんと一般より懸賞募集をなせしも之をと云う優秀のものなかりしかば(『中国新聞』1916年7月1日)」と優秀作が集まらなかったことが報じられている。そこで当局者は、京都高等工芸学校教授であった武田にその選定の一切を任せるとしたわけであった。

武田は、京都高等工芸学校および京都市立美術工芸学校に募集を呼びかけ、59名から323点の作品を集めたのである。そのデザインの内訳としては、蝙蝠の形が103点、フク山の文字が79点、2つの「く」の字と山の字の組合せが37点、9つの「フ」の字と山の字の組合せ28点、福山の文字が21点、福山城の形が5点などで、様々なパターンのデザインが集まった。このなかで武田は、間部時雄の考案した蝙蝠を山の形にしたデザイン(参考図)を当選とした。間部は、京都高等工芸学校の武田および浅井忠の弟子で、当時は同校の助教授で、かつ関西美術院の教授も務めていた画家であった。武田は、その当選作にさらに手を加えたダイナミックな形(参考図)も考案したが、最終的には間部の原案で発表したのである。つまり間部時雄の原案を作り、武田五一が選んで市章に決定していったわけである。



参考) 武田五一《福山市記章修正案》

福山市公会堂

福山市は1918年(大正7年)、市制施行10周年の1926年(大正15年)を目途に福山市公会堂、福山市庁

第1室：武田五一 コウモリマークを選んだ建築家

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
1	(複写写真)		武田五一の父 (直行)		写真	20.0 × 25.0
2	(複写写真)		武田五一の母 (八重)		写真	20.0 × 25.0
3	(複写写真)		武田五一夫妻		写真	20.0 × 25.0
4	(複写写真)		武田五一肖像		写真	20.0 × 25.0
5	(複写写真)		卒業証書		写真	20.0 × 25.0
6	作者不詳		武田五一肖像		油彩, カンヴァス	65.0 × 52.5
7	永雲	不詳	武田博士像		ブロンズ	29.5 × 29.5 × 13.0
8	久保田鼎など		武田五一ヨーロッパ留学 送別画帖	1901	墨, 彩色, 絹	14.5 × 11.9 × 2.7
9	河井寛次郎	(1890-1966)	海鼠瓜壺 (武田五一旧蔵)	1930頃	陶	25.0 × 16.0 × 16.0
10	富岡鉄斎	(1836-1924)	児童歓喜之図 (武田五一旧蔵)	1922	紙本墨画淡彩	133.0 × 32.6
11	藤井松林	(1824-1894)	藤井松林 画帖	1878	墨, 彩色, 紙	16.4 × 11.6
12	(写真アルバム)		「思い出」		写真	22.5 × 23.0
13	(写真アルバム)		「TAIWAN NO OMOIDE」	1931	写真	19.2 × 26.5
14	(写真アルバム)		「パナマ博」	1915	写真	18.3 × 30.3
15	(写真アルバム)		「告別式」		写真	29.5 × 24.0
16	(武田五一旧蔵)		法隆寺古木		木	14.5 × 10.0 × 17.0
17	(武田家旧蔵)		一周忌記念百万塔		木	11.0 × 5.6 × 5.6
18	(武田五一旧蔵)		勲章5種 (「勲二等瑞宝章」「勲六等瑞宝章」「勲四等旭日小綬章」「昭和大礼記念章」「紀元二千六百年祝典記念章」)			
19	佐々田憲一郎	(1824-1995)	福山市公会堂	1949	油彩, 板	33.4 × 45.5
20	武田五一	(1872-1938)	福山市公会堂設計図	1926		
21	武田五一		福山市公会堂模型 (西川龍也監修)	1926/2004		23.6 × 45.7 × 67.0
22	武田五一		福山市庁舎模型 (西川龍也監修)	1930/2007		21.2 × 118.1 × 100.4
23	武田五一		福山市議会議事堂模型 (西川龍也監修)	1930/2007		27.1 × 28.3 × 32.0
24	武田五一		五重塔		油彩, ボード	33.0 × 23.5
25	武田五一		ケイトウ		油彩, ボード	22.5 × 15.8
26	武田五一		柿と薔薇		油彩, ボード	24.0 × 32.7
27	武田五一		紅葉に鶺鴒 (色紙)		淡彩, 色紙	27.3 × 24.1
28	武田五一		梅に鶺鴒 (色紙)		淡彩, 色紙	27.3 × 24.1
29	武田五一		桜に小鳥 (色紙)		淡彩, 色紙	27.3 × 24.1
30	武田五一		富士山 (色紙)		淡彩, 色紙	27.3 × 24.1
31	武田五一		浪と日の出	1932	絹本着色	114.0 × 41.0
32	武田五一		椿に雀		絹本淡彩	77.4 × 36.5
33	武田五一		アナナス		絹本淡彩	36.4 × 41.4
34	武田五一		芙蓉・薄・菊		絹本淡彩	142.5 × 45.5
35	武田五一		草花		淡彩, 紙	41.0 × 59.5
36	武田五一		縮緬長襦袢「マルホフ式染織模様」	1913年	布	131.0 × 127.8
37	武田五一		縮緬布地「マルホフ式図案 I」	1912年頃	布	18.0 × 25.0
38	武田五一		縮緬布地「マルホフ式図案 II」	1912年頃	布	18.0 × 25.0
39	武田五一		手拭図案「武田菱、G.T」	1910年代	布	90.0 × 34.0
40	武田五一		手拭図案「たけた、万年青 (おもと)」	1910年代	布	84.0 × 33.5
41	武田五一		浴衣地見本 9枚		木綿	39.0 × 36.0
42	武田五一		棚 (サイドボード)	1929頃	木	83.5 × 81.5 × 30.0
43	武田五一		名刺入れ		木材	10.6 × 17.8 × 13.8
44	(武田五一旧蔵)		帽子型灰皿		ブロンズ	7.0 × 16.0

第2室：日本の近代美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
45	高橋秀	(1930-)	ブルーボール# 101	1971	油彩, カンヴァス	142.0 × 190.0
46	巖嘸	(1931-)	Violin on the chair	1967	油彩, 木	75.0 × 45.0 × 50.0
47	山口長男	(1902-1983)	壺形	1959	油彩, 合板	183.0 × 274.0
48	作者不詳		姫谷焼色絵日輪竹文皿	17世紀後半	磁器	3.2 × 17.5 × 17.5
49	樂吉左衛門	(1949-)	黒樂茶碗 銘夜聴	2003	陶	9.3 × 13.0 × 13.0
50	北大路魯山人	(1883-1959)	金銀彩武蔵野鉢	1925-34	陶	15.2 × 27.5 × 27.5
51	金重陶陽	(1896-1967)	一重切花入	1964	陶	20.0 × 13.0 × 11.0
52	岸田劉生	(1891-1929)	橋	1909	油彩, カンヴァス	33.6 × 45.7

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
53	岸田劉生		静物(赤き林檎二個とピンと茶碗と湯呑)	1917	油彩, カンヴァス	33.7×45.8
54	岸田劉生		晩春の草道	1918	油彩, カンヴァス	45.0×36.0
55	岸田劉生		新富座幕合之写生	1923	油彩, カンヴァス	31.9×41.0
56	岸田劉生		麗子十六歳之像	1929	油彩, カンヴァス	47.2×24.8
57	白瀧幾之助	(1873-1960)	帽子の婦人	1905-10頃	油彩, カンヴァス	72.3×53.0
58	南薫造	(1883-1950)	夏	1919	油彩, カンヴァス	116.7×91.0
59	須田国太郎	(1891-1961)	冬の漁村	1937	油彩, カンヴァス	48.5×59.7
60	梅原龍三郎	(1888-1986)	仙酔島の朝	1932頃	油彩, カンヴァス	65.5×80.5
61	安井曾太郎	(1888-1955)	手袋	1943-44	油彩, カンヴァス	89.3×72.8
62	小磯良平	(1903-1988)	婦人像	1969	油彩, カンヴァス	52.0×44.0
63	熊谷守一	(1897-1929)	女の顔		油彩, 板	41.0×32.0
64	菊池契月	(1879-1955)	楚蓮香		絹本着色	164.5×71.1
65	岸駒(画)・皆川淇園(書)	(生)1749-1838 / (没)1734-1807	牡丹孔雀画・牡丹孔雀書	1800	絹本着色・絹本墨書	各139.2×64.0
66	藤井厚二	(1888-1938)	藤焼釣香炉飛鶴	1930年代	陶	7.0×41.0×28.0
67	藤井厚二		藤焼染付七角菓子鉢 今日庵	1930	陶	8.5×19.5×19.5
68	藤井厚二		黄釉龍耳花瓶	1930年代	陶	33.0×12.7×12.7
69	藤井厚二		青磁獅子香炉	1930年代	陶	15.5×15.5×13.0
70	藤井厚二		夜梅茶碗	1930年代	陶	9.5×10.6×10.6
71	藤井厚二		茶碗 水仙	1930年代	陶	8.9×12.8×12.8
72	高松次郎	(1936-1998)	平面上の空間	1982	油彩, カンヴァス	218.0×182.0
73	松本陽子	(1936-)	再び生命体について	2008	油彩, パステル, 木炭, カンヴァス	200.0×200.0
74	吉田卓	(1897-1929)	静物	1924	油彩, カンヴァス	65.0×53.0
75	小林徳三郎	(1884-1949)	花と少年	1930	油彩, カンヴァス	53.1×65.0
76	野田弘志	(1936-)	化石のある静物	1988	油彩, カンヴァス	72.8×91.0
77	堀内正和	(1911-2001)	線C	1954	鉄, セメント	45.0×78.0×46.0
78	土谷武	(1926-2004)	植物空間VI	1990	鉄	64.0×57.5×41.5

第3室：ヨーロッパ美術

*は寄託作品

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
79	モーリス・ユトリロ	(1883-1955)	雪のラバン・アジル	1916頃	油彩, カンヴァス	50.1×62.5
80	アルベール・マルケ	(1875-1947)	停泊船, 曇り空	1922	油彩, カンヴァス	38.4×46.0
81	パブロ・ピカソ	(1881-1973)	近衛騎兵(17, 18世紀の近衛騎兵)	1968	油彩, パネル	81.0×60.0
82	パブロ・ピカソ		りんごとグラス, タバコの包み	1924	油彩, カンヴァス	16.0×22.0
83	ギュスターヴ・クールベ	(1819-1877)	波	1869	油彩, カンヴァス	34.5×51.8
84	ジュゼッペ・パリッツィ	(1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870頃	油彩, カンヴァス	49.0×72.0
85	ジョヴァンニ・セガンティーニ	(1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩, カンヴァス	120.0×87.0
86	メダルド・ロツン	(1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス, 石膏	37.0×30.0×17.0
87	ジョルジュ・ルオー	(1871-1958)	ユビュ王	1939頃	油彩, カンヴァス	45.5×68.5
88	ハンス・リヒター	(1888-1976)	ペルナスコーニ氏像	1917	油彩, カンヴァス	60.0×47.0
89	クルト・シュヴィッターズ	(1887-1948)	抽象19(ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩, 厚紙	69.5×49.8
90	ウンベルト・ボッチョーニ	(1882-1916)	カフェの男の習作	1914	油彩, カンヴァス	58.0×46.0
91	ジャコモ・パッラ	(1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩, カンヴァス	51.0×60.5
92	ジョルジョ・デ・キリコ	(1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩, カンヴァス	80.0×60.0
93	ソーニャ・ドロローネー	(1885-1979)	色彩のリズム	1953	油彩, カンヴァス	100.0×220.0
94	サンドロ・キア	(1946-)	少女	1981	油彩, パステル, 紙, カンヴァス	194.0×150.0
95	ルチオ・フォンタナ	(1899-1968)	空間概念-銀のヴェネツィア	1961	油彩, ガラス, カンヴァス	60.0×50.0
96	ピエロ・マンゾーニ	(1888-1978)	アクローム	1961	小石, カンヴァス	70.0×50.0
97	ペリクレ・ファッツィーニ	(1913-1987)	風(踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0×80.0×90.0

和室展示：松本コレクション「申年を祝う」

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
98	永樂即全	(1917-1998)	御本写猿猴茶碗	昭和-平成時代	陶	8.3×12.5×12.5
99	樂左入(樂家6代)	(1683-1739)	黒樂福寿文字入茶碗	江戸時代	陶	7.4×10.4×10.4
100	樂一入(樂家4代)	(1640-1696)	茶入 銘 子猿	江戸時代	陶	7.0×5.5×5.5
101	大村廣陽	(1891-1983)	猿猴	昭和時代	絹本着色	144.0×51.0

舎、福山市議会議事堂の一連の施設を整備することを計画し、準備を開始したものの、事業を進める予算の確保は十分に進まず計画は滞っていた。そうしたなか1926年(大正15年)、公会堂建設の基金4万円が阿部家より寄付されたことにより、公会堂のみを先行して建設することに決まったのである。建築家については、阿部家の推薦により武田に依頼されることになり、第1案の集会施設案が提出された。しかし、その予算規模による案は「狭小」であるとの意見が出され、急遽市債を追加して規模を拡大することになり、工事費は4万8千500円、設備費は、7千250円、雑費3千400円で、総計5万9千150円の経費が費やされたのである。

建物は、鉄筋コンクリート造で、間口60尺(約18m)、奥行95尺(約29m)、高さ38尺(約11m)、演壇は開口5間(約9m)、奥行3間(約5.4m)、外部はモルタル式海綿叩き塗りで色は黄色、内部は粗面水性ペンキ塗りで側面は赤色との記録ある。構造は、鉄筋コンクリートラーメン構造の2階建(一部平屋建)で、塔屋が2本付属していた。中央大広間屋上は、鉄骨トラス造で支えられたフラット・ルーフで、屋上は「露台」として使用されたためコンクリート仕上げだったと考えられる。内部の意匠には、総じて柔らかい曲線を用いたポルト天井や正面壁面の連続アーチ装飾が見られる。外観の意匠では、正面玄関に3連アーチの開口部あり、その左右に赤い丸屋根の塔屋を擁するという特徴的なもので、そしてパラペット〔屋上のへり〕頂部には赤いスパニッシュ瓦が用いられ、全体としてもいわゆる「スパニッシュ様式」の建築として考えられ、市民にも長く親しまれるものであった。

初代市長・阿武信一は式辞で、「公会堂は其の必要を感じる痛切なるにも拘らず(…)未だ之が建設に染指するを得ざりしは市民の常に遺憾とするところなりとす。旧藩主阿部伯爵閣下(…)今回特に資を投じ、計を具して公会堂の具体化を促進せらる。(…)堂の内外共に最新の形式に則り、布置が最善の考案に成り、構築堅牢を極め通風採光間然する所なし。斯界の権威者武田博士設計監督の下に完成を告げ茲(ここ)に本日を迎うるに至りたるは洵(まこと)に慶賀(『福山学生会雑誌』1927年7月)」に堪えないと述べ、感無量の心情とその喜びを露わにしたのである。

さらに福山市庁舎・福山市議会議事堂は、昭和に入って天皇即位大礼記念事業として取り組まれ、1930年(昭和5年)12月に竣工した。

デザイン・工芸

武田は、建築設計から橋梁、テキスタイル、グラフィックのデザイン、および寺社建築修復まで幅広い仕事をこなしたが、その原点にはヨーゼフ・ホフマンのウィーン工房(1903年)における建築設計から装飾、家具、食器、庭園まで幅広いデザイン活動がモデルとしてあったと思われる。武田のホフマンへのオマージュ的な仕事としては、「マルホフ式」なるテキスタイル・デザイン(図)がある。自身の言によると「マルホフ式なる名称は私が命〔なづ〕けた名で其の起原は、図案の調子が奥国〔オーストリア〕維也納〔ウィーン〕の国立美術学校にエマニエル、マルポール〔エマニュエル・マルゴールド〕という奇才に富む青年が有て特色のある図案を作り、小は雑誌の表紙から大は博物館の建築に迄応用されるに至った。この青年の教授を担当する教師がジョセフ〔ヨーゼフ〕、ホフマン氏である。そこでマルポールのマルとホフマンのホフとを合せてマルホフ式と極〔ママ〕めたのです。最初渦花模様と命じようとしたが矢張人の耳に新なるようにマルホフとしたのです。処が幸に世間に一の形式として採用されましたが悲しい事には其実質は全て違ったものであります(『京都美術』1913年12月、13頁)」としている。

その特徴として、色彩はできるだけ鮮明な色を使い、原色の「綺麗な色」による「面白い」配色をしようとした。形態的には、自然の写生に基づいた有機形態ではなく、伝統性を排した「人間の頭で考え出した」幾何学的な模様であった。

武田は、正月や祭りの日には、娘たちにこのマルホフ式模様の着物を着せたりしていた。「その時、知り合いの人からその着物はどこから買ったのかときかれましたので、お父さんが学校で染めてもらった話をしました。当時、一般の市場には出ていなかったもので珍しいものでした(『武田五一・人と作品』博物館明治村、1987年、141頁)」と長女の和田模も述懐している。

また武田は、工芸のデザインにも熱心で、1931年(昭和6年)、京都・夷川通りで家具商を営み、洋家具を始めた宮崎家具3代目宮崎平七とともに京都家具工芸研究会を設置した。顧問として、武田をはじめとして図案家の神坂雪佳、京都帝国大学の藤井厚二、古宇田實、京都高等工芸学校の本野精吾、委員として建築家の安井武雄、京都高等工芸学校の霜鳥正三郎、大蔵省臨時議院建設局の吉武東里があたり、宮崎家具が製作を担当した。1933年(昭和8年)5月に大阪阪急と京都・公会堂東館で開かれた家



参考) 武田五一《福山市公会堂》



参考) 武田五一《福山市庁舎》



参考) 武田五一《福山市議会議事堂》



37 武田五一《縮緬布地「マルホフ式図案Ⅰ」》



36 武田五一《縮緬長襦袢「マルホフ式染織模様」》



42 武田五一《棚(サイドボード)》



31 武田五一《浪と日の出》

具工芸展に出品している。武田邸のために製作された「棚(サイドボード)」(図)も宮崎家具製のものと考えられる。武田は、家具も貴族趣味や伝統を脱して新しい時代にふさわしいモダンなものが求められるとし、家具や室内を設計していたのである。

絵の腕前

武田の絵の上手さは、つとに有名であるが、それは少年時代からのもので、学生時代以来ずっと目立ってきた。

画家で、京都帝国大学の同僚であった太田喜二郎は、「大学助教授から欧州留学時代の水彩画鉛筆スケッチには芸術的天分の閃として線の自由奔放と自信に充ちた力強さはあり、熱心で真剣な博士少壮時代の俳〔おもかげ〕を髣髴〔ほうふつ〕しているが綺麗好きなき質は寧ろ晩年の四条派の軽妙な筆技に現れて居る様に思う。水彩油絵で古建築を描いた本質的なものに至っては終始一貫している。博士は暇さえあれば旅中でも談話中でもスケッチされたが欧州留学当時の熱心さは想像に余るものがあったと思う。(…)博士は会議の最中でも座談中にも議案の余白やメニューに唐草模様の様な図を鉛筆で描いて居られる場合が多かった(『建築雑誌』1938年6月、13頁)」と、水彩や油彩をこなしていた様子を述べる。

京都帝国大学を退官してからは、日本画を描き始め、弟子たちにも作品を配って歩いたという。まだ、習い始めでどこか不慣れなところがあつたようだが、坂静雄にも「君僕の日出の絵はまだなかつたね」と言ったようで、「僕に画いた正月用の日出の絵をわざわざ持参して下さつた。これは大晦日に表装が出来て、正月は床に掛けておいたが、これが先生の得難い記念となつた。玄人の絵から見ると仕上りの醜い絵だが、先生得意の水彩画の味があり、私には其の技巧すらも却つて懐かしい思出である(『建築雑誌』1938年6月、20頁)」と述懐している。

最後の日

武田は、1938年(昭和13年)2月1日、何時ものように京都から電車で郡山に行き、そこから車で法隆寺の修理工事事務所に移動している最中に発病し、事務所に着くや冷汗をかいて背中への痛みを訴えた。近所の医者に見てもらつたが病名不明で、直ちに職員であつた浅野清がハイヤーで京都の自宅に届け、「ナニ、家に帰つて、一風呂あびたらよくなるよ(『武田五一・人と作品』前掲書、135頁)」と言つていたが、わずか4日後に66歳で亡くなつてしまつた。

武田は、見るからに体躯頑強で元気そのものであり、「その時も異常をそれほど気にもかけず、かかりつけの中西医師に、「もしひまなら来て下さい」などと言つていたというが、死の直前、看護の妹に、「痰がつまるので起こしてくれ」といい、起きて咳をしたトタンに、どつと発作に襲われたという。解剖の結果、動脈の破裂と判定されたとのことだが、鉄のような博士の肉体も、かくも不慮の死ともいふべきものへみちびいたものは、あるいはこの明治のプレイボーイの、京の遊興の日々の間に、いつか根ざしていたかもしれない(『武田五一・人と作品』118頁)」と、死の速因を向井正也は推測している。

あるいは、二男の英吉は、「父が病氣だというので早速子供を連れて京都に見舞に行つたのが2月4日だつた。それまで父は時々病氣したこともあるので別に大したことではないと思つて先づ安心して別れたのである。其の帰る時父はいつもの調子で去年生まれて父に名を付けて貰つた幸治に触りながら「お前はいつも元気だな」と笑ひながら言つたのを覚えている(『建築雑誌』1938年6月、19頁)」と、病状は安定していたにも関わらず、その死がいかに突然だつたのかがわかる。

偉大な父親を持つた子供たちは何かと比較されて苦勞するものだが、武田の息子たちも例外でなかつたようだ。英吉の談話を聞いた藤森照信は、「京都帝大教授にして関西を代表する建築家の息子として生きるのは思春期の青年にはむずかしく、何をしても父と比較され父を引き合いに出され、自分自身というものが周囲から認められず、おおいに父に反発し、父が没した時には、ここぞとばかり弟と二人で庭に出て家にあつた父の図面を燃やしたばかりか、父の胸像を庭の隅に埋めた(『武田五一・田辺淳吉・藤井厚二 日本を意匠した建築家たち』ふくやま美術館、8頁)」と、巨人・武田五一を父に持つた息子たちの苦惱を斟酌して記述している。

武田五一は、父親のため1913年(大正2年)に武田家墓碑を設計し、東京・駒込の勝林寺に建立したが、自らもここに眠つている。なお門下生たちは武田を慕つて、京都・嵯峨祇王寺に供養塔を建立しているのである。

谷藤史彦(ふくやま美術館)